

エッセイ集

ロマンの切子細工

森村誠一

エッセイ集

きりこざいく
ロマンの切子細工



昭和53年7月31日 初版発行

著者 森村誠一

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 かどかわしよてん 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 郵便番号 102

電話（東京）（265）7111〈大代表〉 振替 東京3-195208

曉印刷・宮田製本

Printed in Japan

0095-883075-0946(0)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

切子細工

旅の一品料理

大陸横断飢餓鉄道 一三

青春の旅情 一七

幼い日の遠足 一九

雪山讃歌 二三

夏の北アルプス 二四

丹沢と私 二九

青く烟る八ヶ岳の憶い出 三三

山で海水浴 三六

小説と私

我が「作品世界」への招待	三
私のタイトル縁起『一の』	四
人間の証明 作者の証明	六
虚構を虚構とすれば	五
貪婪な胃袋	五
作品インタビュー『終身不能囚』	五
不「純文学」の栄光と誇り	五
実作者の批評を考える	三
犯罪とフィクション	六
逆境のなかでの幸せの演技	六
ゴーストライターのルール違反	七
雑誌と私	三

横溝ミステリー復活の土壌——七四

複数並読法——七

作品論——六

新田次郎氏『栄光の岩壁』——六

新田次郎氏『アラスカ物語』——八四

新田次郎氏『銀嶺の人』（上・下）——五

柳田邦男氏『空白の天気図』——八九

国枝史郎氏『明暗二道』——六〇

マイ・シューヴァル 共著『笑う警官』——五

パール・ヴァール 浩 訳

アーサー・ヘイリー著 淳 訳『マネーチェーンジャーズ』——六

G・レビュファ著 近藤 等 訳『星にのばされたザイル』——六七

切子細工 3

——馬の耳に念仏を——

しよせん、環境庁は“甘業庁”——二〇三

国を食う虫	——	二〇五
大都会の孤独とミステリー	——	二〇六
犯罪と推理小説の間	——	二二三
風鈴と殺意	——	二二六
風鈴の凶音	——	二三〇
電話の暴力	——	二三三
車優先社会	——	二三四
市民と警察の絆 きずな を取り戻 もど そう	——	二三六
車族と反車族	——	二三〇
新聞を読んで	——	二三三
美ヶ原を“駐車ヶ原”にするな	——	二三五
信州の切り売り	——	二三七
電車の座席	——	二三九
知らず知らずに	——	二四〇
生かされなかった体験	——	二四三

切子細工 4

閑話休題
こゝでひといき

文句なくクーパー——— 一四七

熱っぽい男 岩下 浩——— 一五二

夢をわけ合った仲間——— 一五五

映画初出演——— 一五六

テレビ化にあたって——— 一六二

西条八十様——— 一六三

音楽と私——— 一六七

心に響く“人生の溜息”
たらいき——— 一六九

美酒明暗——— 一七二

食事と雌^{めす}——— 一七三

胃袋のガードマン——— 一七五

夏樹さんの魅力——— 一七六

昔をいまに

ふるさと喪失 一八三

終戦の記憶 一八六

決まり文句 一八九

三十年の星霜 一九二

太平洋戦争の小さな「もしも」 一九四

私の数学 一九六

なつかしき夜店の楽しさ 一九九

いやいやのホテルマン生活 二〇〇

ホテルと煙草(1) 煙草の溜息 二〇一

ホテルと煙草(2) 煙草テスト 二〇四

ホテルと煙草(3) 最後の一服 二〇六

ホテルと煙草(4) 失恋の煙草 二〇八

ホテル裏はなし———三〇

形見の『巖窟王』———二七

切子細工 6

———人生のプリズム———

挫折した劣等感への復讐———三三

劣等生の自信———三三

債務の耐性———三七

知らないから耐えられる———三九

いまの受験勉強は「死学」———三三

どんぐりの競争———三三

一流の山ほど頂きは高く険しい———三五

親と教師は楯の両面———三六

門戸を広げ徹しく鍛えよ———四〇

安易に傾く重要な選択———四三

二十歳のころ——人生はとらえどころのない山——二四六

偽装出世に欺だまされるな——二四九

ああ忠臣サラリーマン——二五七

女学校の運動会——二五九

“中性女類”にはなるな！——二六一

夫婦は一単位ではない——二六三

男のエゴイズム——二六五

新聞広告には人生と世相と責任と……——二六六

切子細工

——言葉の玉手箱——

ウオンテドとギルティの写真——二七五

きゅうりと亡命——二七七

言葉足らず——二七九

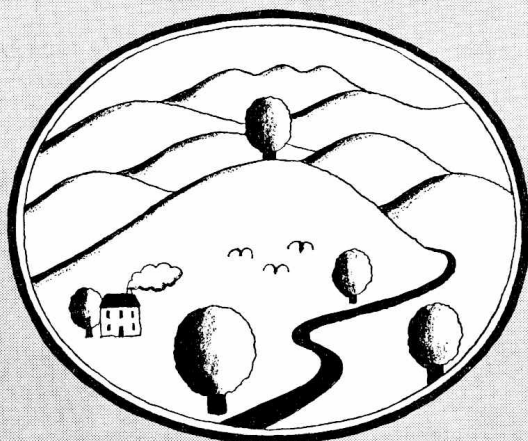
新グレンシャムの法則——二八一

小学校の卒業式	二八三
私のこづかい	二八五
鉢植 ^{はちう} えの朝顔	二八六
私の消夏法	二八八
虚礼 ^{ちいさん} 礼讃	二九〇
角川春樹氏へ	二九二
あとがき	二九四

装丁——岡村元夫
カット——水田秀穂

切子細工 ● 1

旅の一品料理



大陸横断飢餓鉄道

食べ物に関しては、あまりうるさいほうではない。したがって、うまい物を食べるのを目的にして旅に出たことはない。旅先で何気なく出遇った食べ物に、日常の生活では味わえない美味や珍味を発見したことが多い。つまり、私の美味探求は、旅の副産物である。

旅の味としてまず思い出されるのは、大学を卒業して大阪のホテルへ就職した夏、仲の良いボーイとコックといっしょに、北アルプス烏帽子岳から槍ヶ岳を縦走したときのことである。三俣蓮華岳で、登山者から上高地の養魚場の岩魚の塩焼きの話聞いた。その日は槍ヶ岳泊まりの予定であったが、岩魚が目の前にちらついて、嵐模様の山道を十二時間歩きづめに歩いて、上高地へ下ってしまった。憧れの槍ヶ岳の山頂を横目にして、ただ岩魚を食いたい一心で山を下りてしまったのだから、何のために登ったのかわからない。そのようにしてありついた岩魚の塩焼きの味は、いまだに口の中に残っているようである。塩を十分にまぶして炉端で焼いた熱々の岩魚は、口の中に入れると、ジュツと音がして独特の香氣と脂と塩氣が口中にいっぱいに広がる。あれは確かに槍ヶ岳と取り換えただけの価値のある味であった。

その後折ある毎に岩魚を食べたが、あの味にはどうしてもめぐり遇えない。

去年の夏、ソ連へ行ったとき、食物にだいぶ悩まされた。ホテルやレストランや食堂で出す料理がすべて大味で、日本のデリケートな食物に慣らされている自分には、どうしてもなじめなかった。金と時間をかけて探せば、うまい物があるのだろうが、私は旅の味というものは別に苦勞して探さなくても、駅の売店や街の大衆レストランで安い料金で手軽に口に入るものでなければならぬと思っている。そういう意味で、ソ連やアメリカでは、大陸的な大味の物が多く、日本風の駅弁や郷土料理になじんでいる私は閉口した。日本人ほど、食物に対する順応性の少ない国民はないそうである。それだけデリケートな日本の味が舌にしみこんでいる証拠であろう。

ソ連旅行中、グルジャ共和国の首都トビリシのイベリアホテルで「ヤイーツニツア・ス・パミドーラミ」というトマトオムレツのような料理がひどく気に入って、同市に滞在中そればかりを食べた。ホテルの五階にあるスナックで従業員は、リューダおばさんというコックとマロン婆さんというウェイтрес? の二人だけである。そのうちに、リューダおばさんは、我々の顔を見ると、何もオーダーしないうちに「ヤイーツニツア・ス・パミドーラミ」を作って出すようになった。

もし同ホテルを訪れる方があったら、この食べ物是非味わってみるとよいと思う。トマトと卵の味がうまくミックスして、母なる大地のような豊かな味である。ピザのようにして出されるが、色彩も美しく、見た目にもうまそうに感じられる。

ソ連の駅には駅弁は売っていないが、時折車内販売が廻って来る。パンにヨーグルト、ヒエのおじ